

世界おとぎ文庫（グリム篇）

# 森の小人

グリム兄弟  
楠山正雄 訳

Bruder Grimm

# 赤ずきんちゃん

ROTKÄPPCHEN

むかし、むかし、あるところに、ちいちゃいかわいい女の子がありました。それはたれだつて、ちよいとみただけで、かわいくなるこの子でしたが、でも、たれよりもかれよりも、この子のおばあさんほど、この子をかわいがっているものはなく、この子を見ると、なにもかもやりたくてやりたくて、いったいなにをやつていいのかわからなくなるくらいでした。それで、あるとき、おばあさんは、赤いびろうどで、この子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似あうので、もうほかのものは、なんにもかぶらないと、きめてしまいました。そこで、この子は、赤ずきんちゃん、赤ずきんちゃん、とばかり、よばれるようになりました。

ある日、おかあさんは、この子をよんでいいました。

「さあ、ちよいといらつしやい、赤ずきんちゃん、ここにお菓子<sup>かし</sup>がひとつと、ぶどう酒<sup>しゅ</sup>がひとびんあります。これを赤ずきんちゃん、おばあさんのところへもつていらつしやい。おばあさんは、ご病気でよわつていらつしやるが、これをあげると、きつと元気になるでしょう。それでは、あつくならないうちにおでかけなさい。それから、そとへでたら氣をつけて、おぎようぎよくしてね、やたらに、しらない横道へかけだしていったりなんかしないのですよ。そんなことをして、ころびでもしたら、せつかくのびんはこわれるし、おばあさんにあげるものがなくなるからね。それから、おばあさんのおへやにはいったら、まず、おはようございます、をいうのをわすれずにね。はいると、いきなり、おへやの中をきよろきよろみまわしたりなんかしないでね。」

「そんなこと、あたし、ちゃんとよくしてみせてよ。」と、赤ずきんちゃんは、おかあさんにそういって、指きりしました。

ところで、おばあさんのおうちは、村から半道はなれた森の中にありました。赤ずきんちゃんは森にはいりかけますと、おおかみがひよつこりできてきました。でも、赤ずきんちゃんは、おおかみって、どんなわるいけだものだからしりませんでしたから、べつだん、こわいともおもいませんでした。

「赤ずきんちゃん、こんちは。」と、おおかみはいいました。

「ありがとう、おおかみちゃん。」

「たいそうはやくから、どちらへ。」

「おばあちゃんのところへいくのよ。」

「前かけの下にもってるものは、なあに。」

「お菓子に、ぶどう酒。おばあさん、ご病気でよわっているでしょう。それでおみまいにもってつてあげようとおもって、きのう、おうちで焼いたの。これでおばあさん、しつかりなさるわ。」

「おばあさんのおうちはどこさ、赤ずきんちゃん。」

「これからまた、八、九町ちやうもあるいてね、森のおくのおくで、大きなかしの木が、三ぼん立っている下のおうちよ。おうちのまわりに、くるみの生垣いけがきがあるから、すぐわかるわ。」

赤ずきんちゃんは、こうおしえました。

おおかみは、心の中でかんがえていました。

「わかい、やわらかそうな小むすめ、こいつはあぶらがのつて、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっとあじがよからう。ついでにりようほういっしょに、ぱっくりやるくふうがかんじんだ。」

そこで、おおかみは、しばらくのあいだ、赤ずきんちゃんとならんであるきながら、道みちこう話しました。

「赤ずきんちゃん、まあ、そこらじゅうきれいに咲いている花をごらん。なんだって、ほうぼうながめてみないんだらうな。ほら、小鳥が、あんなにいい声で歌をうたっているのに、赤ずきんちゃん、なんだかまるできいていないようだなあ。学校へいくときのよう

に、むやみと、せつせこ、せつせこ、あるいているんだなあ。そとは、森の中がこんなに

あかるくてたのしいのに。」

そういわれて、赤ずきんちゃんは、あおむいてみました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からもれて、これが、ここでもここでも、たのしそうにダンスして、どの木にもどの木にも、きれいな花がいっぱい咲いているのが、目にはいりました。そこで、

「あたし、おばあさまに、げんきでいきおいのいいお花をさがして、花たばをこしらえて、もってつてあげようや。するとおばあさん、きつとおよろこびになるわ。まだ朝はやいから、だいじょうぶ、時間までに行かれるでしょう。」

と、こうおもって、ついと横道から、その中へかけだしてはいつて、森の中のいろいろの花をさがしました。そうして、ひとつつ花をつむと、その先に、もつときれいながあるんじゃないか、という気がして、そのほうへかけて行きました。そうして、だんだん森のおくへおくへと、さそわれて行きました。

ところが、このあいだに、すきをねらつて、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのおうちへかけていきました。そして、とんとん、戸をたたきました。

「おや、どなた。」

「赤ずきんちゃんよ。お菓子とぶどう酒を、おみまいにもつて来たのよ。あけてちようだい。」

「とつ手をおしておくれ。おばあさんはご病気でよわつていて、おきられないのだよ。」  
おおかみは、とつ手をおしました。戸は、ぼんとあきました。おおかみはすぐとはいっていつて、なんにもいわずに、いきなりおばあさんのねているところへ行つて、あんぐりひと口に、おばあさんのみこみました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさんのずきんをかぶつて、おばあさんのお床とこにごろりと寝て、カーテンを引いておきました。

赤ずきんちゃんは、でも、お花をあつめるのにむちゆうで、森じゆうかけまわっていました。そうして、もうあつめるだけあつめて、このうえ持ちきれないほどになったとき、おばあさんのことをおもいだして、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸があいたままになっているので、へんだとおもいながら、中へはいりました。すると、なにかが、いつもとかわつてみえたので、

「へんだわ、どうしたのでしょうか。きょうはなんだか胸がわくわくして、きみのわるいこと。おばあさんのところへくれば、いつだったのしいのに。」と、おもいながら、大きな声で、

「おはようございます。」

と、よんでみました。でも、おへんじはありませんでした。

そこで、お床とこのところへいつて、カーテンをあけてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、ずきんをすつぽり目までさげて、なんだかいつもとようすがかわっていました。

「あら、おばあさん、なんて大きなお耳。」

「おまえの声が、よくきこえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおめめ。」

「おまえのいるのが、よくみえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおてて。」

「おまえが、よくつかめるようにさ。」

「でも、おばあさん、まあ、なんてきみのわるい大きなお口なこと。」

「おまえをたべるにいいようにさ。」

こういうがはやいか、おおかみは、いきなり寝床からとびだして、かわいそうに、赤ずきんちゃんを、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。

これで、したたかおなかをふくらませると、おおかみはまた寝床にもぐって、ながながと寝そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかきだしました。

ちようどそのとき、かりうどがおもてを通りかかって、はてなと思つて立ちどまりました。

「ばあさんが、すごいいびきで寝ているが、へんだな。どれ、なにかかわったことがあるんじゃないか、みてやらずばなるまい。」

そこで、中へはいつてみて、寝床のところへ行つてみますと、おおかみが横になっていました。

「ちきしょう、このばちあたりめが、とうとうみつけたぞ。ながいあいだ、きさまをさがしていたんだ。」

そこで、かりうどは、すぐと鉄砲をむけました。とたん、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのままのんでいるのかもしれないし、まだなかで、たすかっているのかもしれないぞ、とおもいつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみをだして、ねむっているおおかみのおなかを、じよきじよき切りはじめました。

ふたはさみいれると、もう赤いずきんがちらと見えました。もうふたはさみいれると、女の子がとびだしてきて、

「まあ、あたし、どんなにびっくりしたでしょう。おおかみのおなかの中の、それはくらいったらなかつたわ。」と、いいました。

やがて、おばあさんも、まだ生きていて、はいだしてきました。もう、よわって虫の息になっていました。赤ずきんちゃんは、でも、さつそく、大きなごろた石を、えんやらえんやらはこんできて、おおかみのおなかのなかにいっばい、つめました。やがて目がさめて、おおかみがとびだそうとしますと、石のおもみでへたばりました。

さあ、三人は大よろこびです。かりうどは、おおかみの毛皮をはいで、うちへもってかえりました。おばあさんは、赤ずきんちゃんのもってきたお菓子をたべて、ぶどう酒をのみました。それで、すっかりげんきをとりかえました。でも、赤ずきんちゃんは、（もうもう、二どと、森の中で横道にはいって、かけまわったりなんかやめましょう。おあさんがいけないと、おっしやったのですものね。）と、かんがえました。

# ヘンゼルとグレーテル

HANSEL UND GRETEL

一

まずしい木こりの男が、大きな森の近くにこやをもって、おかみさんとふたりのこどもでくらしていました。ふたりのこどものうち、男の子がヘンゼル、女の子がグレーテルといました。しがなくくらしして、ろくろく齒にあたるたべものを、これまでもたべずに来たのですが、ある年、国じゆうが大きい<sup>、</sup>、それこそ、日日のパンが口にはいらずになりました。木こりは、晩、寢床<sup>ねどこ</sup>にはいったものの、こののち、どうしてくらすかか  
んがえると、心配で心配で、ごろごろ寝がえりばかりして、ためいきまじりに、おかみさんに話しかけました。

「おれたち、これからどうなるというんだ。かわいそうに、こどもらをどうやってくわしていくか。なにしろ、かんじん、やしなつてやっているおれたちふたりの、くうものがな  
いしまつだ。」

「だから、おまえさん、いつそこうしようじやないか」と、おかみさんがこたえました。  
「あしたの朝、のつけに、こどもたちをつれだして、森のおくのおくの、木<sup>こ</sup>ぶかい所まで行くのだよ。そこで、たき火をしてやって、めいめいひとかけずつパンをあてがっておい  
て、それなりわたしたち、しごとのほうへすっほぬけて行って、ふたりはそっくり森の中  
においてくるのさ。こどもらにかえり道が見つかりっこないから、それでやっかいがぬ

けようじやないか。」

「そりゃあ、おめえ、いけねえよ。」と、木こりがいいました。

「そんなこたあ、おれにはできねえよ。こどもらを森ん中へおきざりにするなんて、どうしたつて、そんなかんがえになれるものかな。そんなことしたら、こどもら、すぐと森のけだものがでてきて、ずたずたにひつつあいってしまうにきまつてらあな。」

「やれやれ、おまえさん、いいばかだよ。」と、おかみさんはいいました。「そんなことをいつていたら、わたしたち四人が四人、かつえ死にに死んでしまつて、あとは棺桶かんおけの板をけずつてもらうだけが、しごとになるよ。」

こうおかみさんはいつて、それからも、のべつまくしたてて、いやおうなしに、ていしゆを、うんといわせてしまいました。

「どうもやはり、こどもたちが、かわいそうだなあ。」と、ていしゆはまだいつていました。ふたりのこどもたちも、おなががすいて、よく寝つけませんでしたから、まま母が、おとつつあんにもかかつていつていることを、そつくりきいていました。妹のグレーテルは、涙をだして、しくんしくんやりながら、にいさんのヘンゼルにむかつて、

「まあどうしましょう、あたしたち、もうだめね。」と、いいました。

「しツ、だまつてグレーテル」と、ヘンゼルはいいました。「おさわぎでない、だいじょうぶ、ぼく、きつとよくやつてみせるから。」

こう妹をなだめておいて、やがて、親たちがねしずまると、ヘンゼルはそろそろ起きだして、うわぎをかぶりました。そして、おもての戸の下だけあけて、こつそりそとへ出ました。ちようどお月さまが、ひるのようにあかるく照つていて、うちの前にしいてある白い小砂利こじやりが、それこそ銀貨ぎんかのように、きらきらしていました。ヘンゼルは、かがんで、その砂利じやりを、うわぎのかくしいっぱい、つまるだけつめました。それから、そつとまた、もどつて行つて、グレーテルに、

「いいから安心して、ゆつくりおやすみ。神さまがついてくださるよ。」と、いいきかせて、自分もまた、床とこにもぐりこみました。

夜があけると、まだお日さまのあがらないうちから、もうさつそく、おかみさんは起きて来て、ふたりをおこしました。

「さあ、おきないか、のらくらものだよ。おきて森へ行つて、たきぎをひろつてくるのだよ。」



こういつて、おかみさんは、こどもたちめいめいに、ひとかけずつパンをわたして、「さあ、これがおひるだよ。おひるにならないうち、たべてしまおうのではないぞ。もうあとはんなんにももらえないからよ。」と、いいました。

グレーテルは、パンをふたつともそっくり前掛の下にしまいました。ヘンゼルは、かくしにいっぱい小石を入れていましたからね。

そのあとで、親子四人そろって森へ出かけました。しばらく行くと、ヘンゼルがふと立ちどまって、首をのぼして、うちのほうをふりかえりました。しかも、そんなことをなんべんもなんべんもやりました。おとつつあんがそこでいいました。

「おい、ヘンゼル、なにをそんなに立ちどまって見ているんだ。うっかりしないで、足もとに気をつけろよ。」

「なあに、おとつつあん。」と、ヘンゼルはいいました。「ぼくの見てるのはね、あれさ。ほら、あすこの屋根の上に、ぼくの白ねこがあがっていて、あばよしているから。」すると、おかみさんが、

「ばか、あれがおまえの小ねこなもんか、ありやあ、けむだしに日があたっているんじゃないか。」と、いいました。でも、ヘンゼルは小ねこなんか見ているわけではありません。ほんとうはそのまに、れいの白い小砂利こじやりをせつせとかくしから出しては、道におとしおとしいしていたのです。

森のまん中ごろまで来たとき、おとつつあんはいいました。

「さあ、こどもたち、たきつけの木をひろっておいで。みんな、さむいといけない。おとつつあん、たき火をしてやろうよ。」

ヘンゼルとグレーテルとで、そだそだをはこんで来て、そこに山と積つみみあげました。そだの山に火がついて、ぱあつと高く、ほのおがもえあがると、おかみさんがいいました。「さあ、こどもたち、ふたりはたき火のそばであつたまって、わたしたち森で木をきつてくるあいだ、おとなしくまっっているんだよ。しごとがすめば、もどってきて、いつしよにつれてかえるからね。」

ヘンゼルとグレーテルとは、そこで、たき火にあたっていました。おひるになると、めいめいあてがわれた、パンの小さなかけらをだしてたべました。さて、そのあいだも、しじゅう木をきるおのの音がしていましたから、おとつつあんは、すぐと近くでしごとをしていることばかりおもっていました。でも、それはおのの音ではなくて、おとつつあ

んが一本の枯れ木に、枝をいっつけておいたのが、風でゆすられて、あっちへぶつかり、こつちへぶつかりしていたのです。こんなふうにして、ふたりは、いつまでもおとなしくすわって待っているうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、それなりぐつすり、ねてしまいました。それで、やっと目がさめてみると、もうすつかり暮れて、夜になっていました。グレーテルは泣きだしてしまいました。

「まあ、わたしたち、どうしたら森のそとへ出られるでしょう。」と、グレーテルはいいました。

ヘンゼルは、でもグレーテルをなだめて、

「なあに、しばらくお待ち。お月さまが出てくるからね。そうすればすぐと路がみつかるよ。」と、いいました。

やがて、まんまるなお月さまが、高だかとのぼりました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手をひいて、小砂利をおとしたあとを、たどりたどり行きました。小砂利は、吹き上がって来たばかりの銀貨ぎんかみたいに、ぴかぴか光って、路しるべしてくれました。ひとばんじゅうあるきどおしにあるいて、もう夜のしらしら明けに、ふたりはやっとおとつあんのうちにかえって来ました。ふたりがおもてをこつこつとたたくと、おかみさんが戸をあけて出てきました。そして、ヘンゼルとグレーテルの立っているのを見ると、「このろくでなしめら、いつまで森の中で寝こけていたんだい。おまえたち、もううちにかえるのがいやになったんだとおもっていたよ。」と、いいました。

おとつあんのほうは、でも、ああして子どもたちふたりつきり、おきざりにして来たものの、心配で心配でならなかったところでしたから、よくかえって来たといつてよろこびました。

そののち、もうほどなく、うちじゅうまた八方ふさがりになりました。こどもたちがきいていると、夜おそく、寝ながらおつかさんが、おとつあんにむかって、

「さあ、いよいよなにもかもたべつくしてしまつたわ。天にも地にもパンが半きれ、それもたべてしまえば、歌もおしまいさ。こうなりやどうしたって、こどもらを追いだすほかはないわ。こんどは森のもつとおくまでつれこんで、もう、とてもかえり道のわからないようにしなきゃだめさ。どうしたって、ほかにわたしたち助かりようがないからね。」

こんなことをいわれて、ていしゅは胸にぐつと来ました。そして、

（そんなくらいならいっそ、てめえ、しまいこのこつたじぶんのぶりのひとかけを、こど

もたちにわけてやっちなまうのがましだ。」と、かんがえました。

それでも、おかみさんは、ていしゆのことを、まるで耳に入れようともしません。ただもういきりたつて、あくどもくぢならべたてました。それはたれだつて、いったんA<sup>アー</sup>といつてしまえば、あとはB<sup>ベ</sup>とつづけなければならなくなるので、このていしゆも、いちどおかみさんのいうままになったからは、こんども、そのとおりにしなければならなくなりました。

ところで、こどもたちはまだ目があいていて、この話をのこらずきいていました。そこで、おとなたちの寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルはおきあがると、そとへとび出して、この前のように小砂利をひろいに行こうとしました。でも、こんどは、おかみさんが戸に、ぴんと、じょうをおろしてしまったので、ヘンゼルは出ることができなくなりました。

ヘンゼルは、それでも、小さい妹をなだめて、

「グレーテル、お泣きでない。ね、あんしんしてお休み。神さまがきつとよくしてくださいあるから。」と、いいきかせました。

あくる日は、朝つばらからもう、おかみさんはやって来て、こどもたちを寢床<sup>ねどこ</sup>からつれだしました。こどもたちは、めいめいパンのかけらをひとつずつもらいましたが、それはせんよりも、よけい小さいものでした。それをヘンゼルは、森へ行く道みち、かくしの中でぼろぼろにくずしました。そして、おりおり立ちどまっては、そのくずしたパンくずを、地びたにおとしました。

「おい、ヘンゼル、なんだつて立ちどまつて、きよろきよろみているんだな。」と、おとつあんがいいました。「さつさとあるかないか。」

「ぼく、ぼくの小ぼとを、ちゃんとみているんだよ。そら、屋根の上にとまつて、ぼくにさよならしているんじゃないか。」と、ヘンゼルはいいました。

「ばか。」と、おかみさんはまたいいました。「あれがなんではとなもんか。あれは朝日が、けむだしの上で、きらきらしているんだよ。」

ヘンゼルは、それでもかまわず、パンくずを道の上におとしおとして、のこらずなくしてしまいました。

おかみさんは、こどもたちを、森のもつともつとふかく、生まれてまだ来たことのないおおくまで、引っぱって行きました。そこで、こんども、またじゃんじやんたき火を

しました。

そしておっかさんは、

「さあ、こどもたち、ふたりともそこにじっといればいいのだよ。くたびれたらすこし寝てもかまわないよ。わたしたちは、森で木をきつて来て、夕方、しごとがおしまいになれば、もどって来て、いっしょにうちにつれてかえるからね。」と、いいました。

おひるになると、グレーテルが、じぶんのパンを、ヘンゼルとふたりで分けてたべました。ヘンゼルのパンは道にまいて来てしまいましたものね。

パンをたべてしまうと、ふたりは眠りました。そのうちに晩もすぎましたが、かわいそうなこどもたちのところへ、たれもくるものはありません。ふたりがやつと目をあけたときには、もうまつくらな夜になっていました。ヘンゼルは、小さい妹をいたわりながら「グレーテル、まあ待っておいでよ。お月さまが出るまでね。お月さまがおりゃあ、こぼしておいてパンくずも見えるし、それをさがして行けば、うちへかえられるんだよ。」と、いいました。

お月さまが上がったので、ふたりは出かけました。けれど、パンくずは、もうどこにも見あたりません。それは、森や野をとびまわっている、なん千ともしれない鳥たちが、みんなつついてもって行ってしまったのです。それでも、ヘンゼルはグレーテルに、「なあにそのうち、道がみつかるよ。」と、いつていましたが、やはり、みつきりませんでした。夜中じゅうあるきとおして、あくる日も朝から晩まであるきました。それでも、森のそとに出ることができませんでした。それになにしろ、おなががすいてたまりませんでした。地びたに出ていた、くさいちごの実を、ほんのふたつ三つ口にしただけでしたものね。それで、もうくたびれきつて、どうにも足が進まなくなったので、一本の木の下のごろりとなると、そのままぐっすり寝こんでしまいました。

こんなことで、ふたりおとつあんの小屋を出てから、もう三日めの朝になりました。ふたりは、また、とぼとぼあるきだしました。けれど、行くほど森は、ふかくばかりなつて来て、ここらでたれか助けに来てくれなかったら、ふたりはこれなりよわりきつて、

倒れるほかないところでした。

すると、ちようどおひるごろでした。雪のように白いきれいな鳥が、一本の木の枝にとまって、とてもいい声でうたっていました。あまりいい声なので、ふたりはつい立ちどまって、うつとり聞いていました。そのうち、歌をやめて小鳥は羽ばたきをすると、ふたりの行くほうへ、とび立って行きました。ふたりもその鳥の行くほうへついて行きました。すると、かわいいこやの前に出ました。そのこやの屋根に、小鳥はとまりました。ふたりがこやのすぐそばまで行ってみますと、まあこのかわいいこやは、パンでできていて、屋根はお菓子かしでふいてありました。おまけに、窓はぴかぴかするお砂糖さとうでした。「さあ、ぼくたち、あすこにむかって行こう。」と、ヘンゼルがいました。「けっこうなおひるだ。かまわない、たんとごちそうになろうよ。ぼくは、屋根をひとかけかじるよ。グレーテル、おまえは窓のをたべるといいや。ありやあ、あまいよ。」

ヘンゼルはうんと高く手をのばして、屋根をすこしかいて、どんな味がするか、ためしてみました。すると、グレーテルは、窓ガラスにからだをつけて、ぼりぼりかじりかけました。そのとき、おへやの中から、きれいな声でとがめました。

「もりもり　がりがり　かじるぞ　かじるぞ」

わたしのこやを　かじるな　だれだぞ。」

子どもたちは、そのとき、

「かぜ　かぜ

そうちの　子。」

と、こたえました。そして、へいきでたべていました。ヘンゼルは屋根が、とてもおいしかったので、大きなやつを、一枚、そっくりめくってもって来ました。グレーテルは、まるい窓ガラスを、そっくりはずして、その前にすわりこんで、ゆっくりやりはじめました。そのとき、ふいと戸があいて、化けそうに年とったばあさんが、しゅもく杖にすがって、よちよち出て来ました。ヘンゼルもグレーテルも、これにはしたたかおどろいたものですから、せつかく両手にかかえたものを、ぼろりとおとしました。ばあさんは、でも、あ

たまをゆすぶりゆすぶり、こういいました。

「やれやれ、かわいいこどもたちや、だれにつれられてここまで来たかの。さあさあ、はいつて、ゆつくりお休み、なんにもされやせんからの。」

こういつて、ばあさんはふたりの手をつかまえて、こやの中につれこみました。中にはいると、牛乳ぎゅうにゅうだの、お砂糖さとうのかかった、焼きまんじゅうだの、りんごだの、くるみだの、おいしそうなごちそうが、テーブルにならばりました。ごちそうのあとでは、かわいいきれいなベッドふたつに、白いきれがかかっています。ヘンゼルとグレーテルとは、その中にごろりとなつて、天国にでも来ているような気がしていました。

このばあさんは、ほんのうわべだけ、こんなにしんせつらしくしてみせましたが、ほんとうは、わるい魔女まじよで、こどもたちのくるのを知つて、パンのおうちなんかこしらえて、だましておびきよせたのです。ですから、こどもがひとり、手のうちに入はいったがさいご、さつそくころして、にてたべて、それがばあさんのなによりうれしいお祝い日になるというわけでした。魔女は、赤い目をしていて、遠目とおものきかないものなのですが、そのかわり、けものように鼻ききで、人間が寄よってきたのを、すぐとかぎつけます。それで、ヘンゼルとグレーテルが近くへやってくる、ばあさんはさつそく、たちのわるい笑い方をして、

「よし、つかまえたぞ、もうにげようつたつて、にがすものかい。」と、さもにくてらしくいいました。

そのあくる朝もう早く、こどもたちがまだ目をさまさないうちから、ばあさんはおきだして来て、ふたりともそれはもう、まっ赤かにふくれたほっぺたをして、すやすやと、いかにもかわいらしい姿で休んでいるところへ来て、

「こいつら、とんだごちそうさね。」と、つぶやきました。

そこで、ばあさんは、やせがれた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな犬ごやへはこんで行つて、ぴつしやり格子戸こうしどをしめきつてしまいました。ですからヘンゼルが、中でいくらわめきたいだけわめいてみせても、なんのやくにもたちません。それから、ばあさんは、またグレーテルの所へ出かけて、むりにゆすぶりおこしました。そうして、「このなまけもの、さあおきて、水をくんで来て、にいさんに、なんでもおいしそうなものを、こしらえてやるんだ。そとの犬ごやに入れてあるからの、せいぜいあぶらぶとりにふとらせなきや。だいぶ、あぶらののつたところで、おばあさんがたべるのだからな。」と

わめきました。

こうきいて、グレーテルは、わあっと、はげしく泣き立てました。けれどなにをしたつてむだでした。このたちのわるい魔女のいいなりほうだい、どんなことでも、グレーテルはしなければなりませんでした。

こんなしないで、きのどくに、たべられるヘンゼルには、いちばん上等なお料理がつかまりました。そのかわり、グレーテルには、ザリガニのこうらが、わたったばかりでした。

まい朝まい朝、ばあさんは犬ごやへ出かけて行って、

「どうだな、ヘンゼル、指をだしておみせ。そろそろあぶらがのって来たかどうだか、みてやるから。」と、わめきました。

すると、ヘンゼルはたべあましのほそっこい骨を、一本かわりに出しました。ところで、ばあさんはかすみ目しているものですから、見わけがつかず、それをヘンゼルの指だとおもって、どうしてヘンゼルにあぶらがのってこないか、ふしぎでなりませんでした。

さて、それから、かれこれひと月たちましたが、あいかかわらずヘンゼルは、やせこけたままでした。それで、ばあさんも、とうとうしびれをきらして、もうこの上待ちきれないとおもいました。

「やいやい、グレーテル。」と、ばあさんは妹の子にむかってわめきたてました。「さあ、さっさと行って、水をくんでくるのだ。ヘンゼルのこぞうめ、もうふとっていようが、やせていようが、なにがなんだって、あしたこそ、あいつ、ぶつちめて、にてくつちまうんだからな。」

やれやれ、どうしましょう。かわいそうに、この妹の子は、むりやり水をくまされながら、どんなにはげしく泣きじやくったことでしょう。

「神さま、どうぞお助けくださいまし。」この子はさけび声をあげました。「いつそ森の中で、もうじゆうにくわれたほうが、よかったわ。それだと、かえってふたりいっしょに死ねたのだもの。」

「やかましいぞ、このがきやあ。」と、ばあさんはいいました。「泣いたってわめいたって、なんにもなりやあしないぞ。」

あくる日は、朝っぱらから、グレーテルはそとへ出て、水をいっばいはった大鍋なべをつるして、火をもしつけなければなりませんでした。

「パンからさきにやくんだ。」と、ばあさんはいいました。「パンやきかまどはもう火がは

いつているし、ねり粉もこねてあるしの。」

こういって、ばあさんは、かわいそうなグレーテルを、パンやきかまどの方へ、ひどくつきとばしました。かまどからは、もうちよろちよろ、ほのおが赤い舌を出していました。「なかへ、はいこんでみなよ。」と、魔女はいいました。「火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパンを入れるからな。」

これで、もし、グレーテルがなかにはいれば、ばあさん、すぐとかまどのふたをしめてしまうつもりでした。すると、グレーテルは中で、こんがりあぶられてしまうつもりだったので、そこでも、これもついでにもりもりやっってしまうつもりだったので、でも、グレーテルは、いちはやく、ばあさんのはらの中を見てとりました。そこで、

「あたし、わからないわ、どうしたらいいんだか。中へはいるつて、どういうふうにするの。」と、いいました。

「ばか、このくそが、ちよう。」と、ばあさんはいいました。

「口はこんなに大きいじゃないか、目をあいてよくみろよ。このとおり、おばあさんだつてそつくりはいれらあな。」

こう言い言い、やつこら、はうようにあるいて来て、パンやきかまどの中に、首をつっこみました。ここぞと、グレーテルはひとつき、うしろからどんとつきました。はずみで、ばあさんは、かまどの中へころげこみました。すぐ、鉄の戸をぴしんとしめて、かんぬきをかってしまいました。うおッ、うおッ、ばあさんはとてもすごい声でほえたけりました。グレーテルはかまわずかけだしました。こうして、罰<sup>ほち</sup>あたりな魔女は、あわれなさまに焼けただれて死にました。

グレーテルは、まっしぐらに、ヘンゼルのいる所へかけだして行きました。そして、犬ごやの戸をあけるなり、

「ねえヘンゼル、あたしたちたすかつてよ。魔女のばあさん死んじやつてよ。」と、さけびました。

戸があくと、とたんに、ヘンゼルが、鳥がかごからとび出したように、ぱあつととび出して来ました。

まあ、ふたりは、そのとき、どんなにうれしがつて、首つ玉にかじりついて、ぐるぐるまわりして、そしてほほずりしあつたことでしたか。こうなれば、もうなんにもこわがることはなくなりましたから、ふたりは魔女のうちの中に、ずんずんはいつて行きました。



うちじゆう、すみからすみまで、真珠しんじゆや宝石のつまつた箱だらけでした。

「こりや、小砂利こじやりよりずっとましだよ。」と、ヘンゼルは行って、かくしの中に入れられるだけ、たくしこみました。すると、グレーテルも、

「あたしも、うちへおみやげにもつてくわ。」と、行って、前掛にいったいにしました。「さあ、ここらでそろそろ出かけようよ。」と、ヘンゼルはいいました。「なにしろ、魔女の森からぬけ出さなくては。」

それで、二三時間あるいて行くうちに、大きな川の所へ出ました。

「これじゃあ渡れやしない。」と、ヘンゼルはいいました。「橋にも、いかだにも、まるでわたるものがないや。」

「ここには、渡し舟も行かないんだわ。」と、グレーテルがいいました。

「でもあすこに、白いかもが一わおよいでいるわね。きつとたのんだらわたしてくれてよ。」

そこで、グレーテルは声をあげてよびました。

「かもちゃん　かもちゃん　小がもちゃん、

グレーテルとヘンゼルが　来たけれど、

橋もなければ　いかだもない、

おまえの白い　おせなかに　のせてわたして　くださいな。」

かもは、さつそく来てくれました。そこで、ヘンゼルがまずのつて、小さい妹に、いっしよにおのりといいました。

「いいえ。」と、グレーテルはこたえました。「そんなにのつては、かもちゃん、とてもおもいでしよう。べつべつにつれてつてもらいますわ。」

そのとおり、このしんせつな鳥はしてくれました。それで、ふたりぶじにむこう岸に渡りました。それから、すこしまたあるくうち、だんだんだんだん、森が、おなじみのけしきになって来ました。そしてとうとう、遠くの方に、おとつあんのこやをみつめました。さあ、ふたりはいちもくさんに、かけだしました。ぽんとおへやの中にとびこんで、おとつあんの首根つこにかじりつきました。

この木こりの男は、こどもたちを森の中に置きざりにして来てからというもの、ただ

の一時きでも、笑える時がなかったのです。ところで、おかみさんも死んでしまっていました。

グレーテルは、前掛をふるいました。すると、真珠しんじゆと宝石ほうせきが、おへやじゆうころがりだしました。こんどは、ヘンゼルが、かくしに片手をつつこんで、なんどもなんどもつかみだしては、そこにばらまきました。

まずこんなことで、心配や苦勞はきれいにふきとんでしまいました。親子三人それぞれ、そうれいしくめで、いっしょになかよく、くらししました。

わたくしの話もこれで市がさかえました。ほら、あすこに、小ねずみがちよろちよろかけていますね。たれでもつかまえた人は、あれで、大きな毛皮のずきんを、ごじぶんでこしらえてごらん下さい。

# 星の銀貨

DIE STERNTALER

むかし、むかし、小さい女の子がありました。この子には、おとうさんもおかあさんもありませんでした。たいへんびんぼうでしたから、しまいには、もう住むにもへやはなし、もうねるにも寝床ねどこがないようになって、とうとうおしまいには、からだにつけたもののほかは、手にもったパンひとかけきりで、それもなさけぶかい人がめぐんでくれたものでした。

でも、この子は、心のすなおな、信心のあつい子でありました。それでも、こんなにして世の中からまるで見すてられてしまっているのです、この子は、やさしい神さまのお力にだけすがって、ひとりぼっち、野原の上をあるいて行きました。すると、そこへ、びんぼうらしい男が出て来て、

「ねえ、なにかたべるものをおくれ。おなかがすいてたまらないよ。」と、いいました。女の子は、もっていたパンひとかけのこらず、その男にやってしまいました。そして、「どうぞ神さまのおめぐみのありますように。」と、いのってやって、またあるきだしました。すると、こんどは、こどもがひとり泣きながらやって来て、

「あたい、あたまがさむくて、こおりそうなの。なにかかぶるものちようだい。」と、いいました。

そこで、女の子は、かぶっていたずきんをぬいで、子どもにやりました。

それから、女の子がまたすこし行くと、こんど出て来たこどもは、着物一枚着ずにふるえていました。そこで、じぶんの上着うわぎをぬいで着せてやりました。それからまたすこし

行くと、こんど出てきたこどもは、スカートがほしいというので、女の子はそれもぬいで、やりました。

そのうち、女の子はある森にたどり着つきました。もうくらくらなくなっていましたが、また、もうひとりこどもが出て来て、肌着はだぎをねだりました。あくまで心のすなおな女の子は、（もうまっくらになっているからだれにもみられやしないでしょう。いいわ、肌着もぬいであげることにはしましょう。）と、おもって、とうとう肌着までぬいで、やってしまいました。

さて、それまでしてやって、それこそ、ないといって、きれいさっぱりなくなってしまうとき、たちまち、たかい空の上から、お星さまがばらばらおちて来ました。しかもそれがまはったくの、ちかちかと白銀色はくぎんいろをした、ターレル銀貨でありました。そのうえ、ついいましがた、肌着をぬいでやってしまったばかりなのに、女の子は、いつのまにか新しい肌着をきていて、しかもそれは、この上なくしなやかな麻あさの肌着でありました。

女の子は、銀貨をひろいあつめて、それで一ししようゆたかにくらししました。

# おおかみと七ひきのこどもやぎ

DER WOLF UND DIE SIEBEN JUNGEN GEISSLEIN

## 一

むかし、あるところに、おかあさんのやぎがいました。このおかあさんやぎには、かわいいこどもやぎが七ひきあって、それをかわいがることは、人間のおかあさんが、そのこどもをかわいがるのと、すこしもちがったところはありませんでした。

ある日、おかあさんやぎは、こどもたちのたべものをとりに森まで出かけて行くので七ひきのこどもやぎをよんで、こういいきかせました。

「おまえたちにいっておくがね、かあさんが森へ行ってくるあいだ、気をつけてよくおるすばんしてね、けっしておおかみをうちへ入れてはならないよ。あいつは、おまえたちのこらず、まるのまんま、それこそ皮も毛もあまさずたべてしまうのだよ。あのわるものはわからせまいとして、ときどき、すがたをかえてやってくるけれど、なあに、声はしやがれて、があがあごえだし、足はまつ黒だし、すぐと見わけはつくのだからね。」

すると、こどもやぎは、声をそろえて、

「かあさん、だいじょうぶ、あたいたち、よく気をつけて、おるすばんしますから、心配しないで行っておいでなさい。」と、いいました。

そこで、おかあさんやぎは、メエ、メエといって、安心して出かけて行きました。

やがて、まもなく、たれか、おもての戸をとんとたたたくものがありました。そうして、「さあ、こどもたち、あけておくれ、おかあさんだよ。めいめいに、いいおみやげをもって来たのだよ。」と、よびました。

でも、こどもやぎは、それがしゃがれた、があがあ声なので、すぐおおかみだということがわかりました。そこで、

「あけてやらない。おかあさんじゃないから。おかあさんは、きれいな、いい声してるけれど、おまえはしゃがれつ声こゑのがあがあ声なもの。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、荒物屋あらものやの店へ出かけて、大きな白はくぼくを一本買って来て、それをたべて、声をよくしました。それからまたもどつてきて、戸をたたいて、大きな声で、「さあ、こどもたち、あけておくれ。おかあさんだよ、みんなにいいものをもって来たのだよ。」と、どなりました。

でも、おおかみはまつ黒な前足を、窓のところにかけていたので、こやぎたちはそれをみつけて、

「あけてはやらない。うちのおかあさんは、おまえのようなまつ黒な足をしていない。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、パン屋の店へ出かけて、

「けつまづいて足をいためたから、ねり粉をなすっておくれ。」と、いいました。で、パン屋が、おおかみの前足にねったこなをなすつてやりますと、こんどは、粉屋こなやへかけつけて行って、

「おい、前足に白いこなをふりかけてくれ。」と、いいました。

「おおかみのやつ、まただれかだますつもりだな。」

そう粉屋はおもつて、ぐずぐずしていました。

するとおおかみは、

「すぐしないと、くつつちまうぞ。」と、どなりました。

そこで、粉屋はこわくなって、おおかみの前足を白くしてやりました。まあ、こういう

ところが、人間のだめなところですね。

さて、わるものは、三どめに、やぎのおうちの戸口に立って、とんとん、戸をたたいて、  
こういいました。

「さあごもたちや、あけておくれ、おかあさんがかえって来たのだよ、おまえたちめい  
めいに、森でいいものをみつけて来たのだよ。」

子やぎたちは、声をそろえて、

「さきに足をおみせ、うちのおかあさんだかどうだか、みてやるから。」

そういわれて、おかかみは、前足を窓にのせました。ごどもやぎがそれを見ますと、白  
かったので、おかかみのいうことを、すっかりほんとうにして、戸をあけました。

ところで、はいつて来たのはたれでしたらう、おかかみだつたではありませんか。

みんな、わあつとおどろいて、ふるえあがって、てんでんにかくれ場所をさがして、か  
くれようとしました。ひとりは、つくえの下にとびこみました。次は寝床ねどこにはいこみまし

た。三ばんめは、炉ろの中にかくれました。四ばんめは、台所だいどころへにげました。五ばんめは、  
棚たなにあがりました。六ばんめは、洗面せんめんだらいの下にもぐりました。七ばんめは、柱時計  
の箱のなかにかくれました。

ところが、おかかみは、そばからみつけだして、ぞうさなく、ひとりひとり、かたはしか  
らつかまえて、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。ただ、大時計の箱のなか  
にかくれた、いちばん小さな子だけは、みつからずにすみました。さて、たらふくたべたい  
だけたべて、おなかがかくちくになると、おかかみはおもてへにげ出して、木のかげになつて  
青あおとしているしばの上に、ながながとねそべって、ぐうぐういびきをかきだしまし  
た。

### 三

それから間もなく、おかあさんやぎは、森からかえって来ました。ところで、まあ、お  
かあさんやぎは、そのときなにを見たでしょう。おもての戸は、いっぱいにあげひろげて  
ありました。テーブルも、いすも、腰かけも、ほうりだされていました。洗面せんめんだらいは、こ  
なごなにこわれていました。夜着よぎもまくらも、寝台しんたいからころげおちていました。

おかあさんやぎは、こどもたちをさがしましたが、ひとりもみつかりません。ひとりひとり、名前をよんでも、たれも返事へんじをするものがありません。おしまいに、いちばん下の子の名前まで来て、はじめて、ほそい声で、

「かあさん、あたい、時計のお箱にかくれているよ。」というのが、きこえました。

おかあさんやぎは、この子をひっぱりだしてやりました。そこで、この子の口からはじめておおかみが来て、ほかのこどもたちみんなたべてしまったことが、わかりました。そのとき、おかあさんやぎは、かわいそうな子やぎたちのことを、どんなに泣いてかなしんだか、みなさん、さっしてみてください。

やつこのことで、おかあさんやぎは、泣くことをやめて、末すえつ子やぎといっしょに、そとへ出しました。原っぱまでくると、おおかみは、やはり木のかげにながながとねそべってそれこそ木の枝も葉も、ぶるぶるふるい動くほどの高いびきを立てていました。

ところで、おかあさんやぎが、おおかみのようすを遠くからよく見ますと、そのふくれかえったおなかの中で、なにかもそもそ動いているのがわかりました。

「まあ、ありがたい、おおかみのやつ、うちのこどもたちを、お夕飯ゆうはんにして、うのみにのみこんだままだから、みんなきつとまだ生きているのだよ。」

こうおもって、おかあさんやぎは、さっそく、うちへかけこんで行って、はさみと針と糸をとって来ました。それから、おかあさんやぎは、このばけものどてどてつ腹を、ちよきんとはさみで、ひとはさみはさみました。するともうそこに、一ぴきのこどもやぎが、ぴよこんとあたまを出しました。おかあさんはよろこんで、またじよきじよきはさんで行きますと、ひとり出で、ふたり出して、とうとう六ぴきのこどもやぎのこらすが、とびだしました。みんなぶじで、たれひとり、けがひとつしたものもありません。なにしろ、この大ばけものは、むやみとがつがつしていて、ただもう、ぐつく、ぐつく、そのまま、のどのおくへほうりこんでしまっていたからです。

まあうれしいこと。こどもたちは、おかあさんやぎにしつかりだきました。それから、およめさんをもらう式の日の、仕立屋のように、ぴよんぴよんはねまわりました。でも、おかあさんやぎは、こどもたちをとめて、

「さあ、そこらで、みんな行って、ごろた石をひろっておいで、この罰ばちあたりなけだものが寝ねているうちに、おなかにつめてやるのだから。」といいました。

そこで、こどもたちは、われがちにかけだして行って、えんやら、えんやら、ごろた石



をあつめて、ひきずつて来ました。そうして、それを、おおかみのおなかに、つまるだけつめこみました。すると、おかあさんやぎが、あとから、ちよつちよつと、手ばしこく、もとのようにぬいつけてしまいました。それがいかにも早かったので、おおかみがまるで気がつかないし、ごそりともしないまにすんでしまいました。

おおかみは、やつとのこと、寝<sup>ね</sup>たいだけ寝て、立ちあがりました。なにしろ、胃袋<sup>いぶくろ</sup>のなかは石がいつぱいで、のどがからからにかわいてたまらないので、ふき井戸のところへ行つて、水をのもうとしました。ところが、からだを動かしかけますと、おなかの中で、ごろた石がぶつかりあつて、がらがら、ごろごろ、いいました。

がらがら、ごろごろ、なにがなる

そりやどこでなる、腹<sup>はら</sup>でなる。

六ぴきこやぎのなくこえか、

こりや、そうじゃない、ごろた石、

おおかみは、こううたいました。

さて、やつとこすつとこ、ふき井戸の所まで来て、水の上にかがもうとすると、おなかの石のおもみに引かれて、おおかみは、のめりました。そうして、いやおうなしに、泣き泣きおおかみは、水の中におちこみました。

遠くで見っていた七ひきのこどもやぎは、みんなかけよつて来て、

「おおかみ死んだよ。おおかみ死んだよ。」ときげびながら、おかあさんやぎと手をつなぎながら、おおよろこびで、井戸のまわりをおどりまわりました。

# かえるの王さま

DER FROSCHKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH

## 一

むかしむかし、たれのどんなのぞみでも、おもうようになつたときのことでございます。

あるところに、ひとりの王さまがありました。その王さまには、うつくしいおひめさまが、たくさんありました。そのなかでも、いちばん下のおひめさまは、それはそれはうつくしい方で、世の中のことば、なんでも、見て知っていらつしやるお日さまでさえ、まいにちてらしてみても、そのたんびにびっくりなさるほどでした。

さて、この王さまのお城のちかくに、こんもりふかくしげつた森があつて、その森のなかに一本あるふるいぼだいじゆの木の下に、きれいな泉が、こんこんとふきだしていました。あつい夏の日ざかりに、おひめさまは、よくその森へ出かけて行って、泉のそばにこしをおろしてやすみました。そして、たいくつすると、金のまりを出して、それをたかくなげては、手でうけとったりして、それをなによりおもしろいあそびにしています。

ある日、おひめさまは、この森にきて、いつものようにすきなまりなげをして、あそんでいるうち、ついまりが手からそれておちて、泉のなかへころころ、ころげこんでしまいました。おひめさまはびっくりして、そのまりのゆくえをながめていましたが、まりは水

のなかにしずんだまま、わからなくなってしまう。泉はとてもふかくて、のぞいても、のぞいても、底はみえません。

おひめさまは、かなしくなつて泣きだしました。するうちに、だんだん大きな声になつて、おんおん泣きつづけるうち、じぶんでじぶんをどうしていいか、わからなくなつてしまいました。

おひめさまが、そんなふう泣きかなしんでいますと、どこからか、こうおひめさまによびかける声がしました。

「おひめさま。どうなすつたの、おひめさま。そんなに泣くと、石だつて、おかおいそうだと泣きますよ。」

おや、とおもつて、おひめさまは、声のするほうをみまわしました。そこに、一ぴきのかえるが、ぶよぶよふくれて、いやらしいあたまを水のなかからつきだして、こちらをみていました。

「ああ、水のなかのぬるぬるぴつちやりさん、おまえだつたの、いま、なにかいつたのは。」と、おひめさまは、なみだをふきながらいいました。「あたしの泣いているのはね、金のまりを泉のなかにおとしてしまつたからよ。」

「もう泣かないでいらつしやい。わたしがいいようにしてあげますからね。」

「じゃあ、まりをみつめてくれるつていうの。」

「ええ、みつめてあげましょう。でも、まりをみつめて来てあげたら、なにをおれいにくださいますか。」

「かわいいかえるさん。」と、おひめさまはいいました。「おまえのほしいものなら、なんでもあげてよ。あたしのきているきものでも、光るしんじゆでも、きれいな宝<sup>ほうせき</sup>石でも、それから金のかんむりでも。」

「いいえ、わたしはそんなものがほしくはないのです。けれど、もしかあなたがわたしをかわいがつてくださつて、わたしをいつもおともだちにして、あなたのテーブルのわきにすわらせてくださつて、あなたの金のお皿から、なんでもたべて、あなたのちいさいおさかずきで、お酒をのましていただいて、よるになったら、あなたのかわいらしいお床<sup>とこ</sup>のそばで、ねむつてよいとおつしやるなら、わたしは水のなかから、金のまりをみつめてきてあげましょう。」と、かえるはいいました。

「ええ、いいわ、いいわ。金のまりをとつてきてくれさえすれば、おまえのいうとおり、な

んでもやくそくしてあげるわ。」と、おひめさまはこたえました。そういいながら、心の中では、（かえるのくせに、にんげんのなかま入りしようなんて、ほんとうにずうずうしい、おばかさんだわ）と、おもっていました。

かえるは、でも、約束やくそくのとおり、水のなかにもぐって行きました。しばらくすると、ちやんと金のまりを口にくわえて、ぴよこんとうかび上がってきました。そして、「さあ、ひろってきましたよ。」

そういつて、草のなかにまりをおきました。ところが、おひめさまは、そのまりをつかむなり、ありがとうともいわず、とんでかえって行きました。

かえるは大声をあげて、

「まってください、まってください。」といいました。「わたしもいつしよにつれてって。わたしはそんなにかけられない。」

けれど、かえるが、うしろでいくらぎやあ、ぎやあ、大きな声でわめいたって、なんのたしにもなりません。おひめさまは、てんでそんなものは耳にもはいらぬのか、とツとツとうちのほうへかけだして行ってしまっって、かえるのことなんか、きれいにわすれていました。

かえるは、しかたがないので、すごすご、もとの泉のなかへもぐって行きました。

## 二

そのあくる日のことでした。

おひめさまが、王さまや、のこらずのごけらい衆しゅうといっしよに、食事のテーブルにむかつて、金のお皿でごちそうをたべていますと、そとでたれかが、ぴっちやり、ぴっちやり、大理石のかいだんを上がってくる音がしました。そして、上まで上がってしまうと、戸をとんとんたたいて、

「王さまのおひめさま、いちばん下のおむすめご、どうぞこの戸をあけてください。」という声がしました。

おひめさまは立ち上がって行って、たれかしらみようとおもって、戸をあけますと、そこに、きのうのかえるが、ぺっちやりすわっていました。

おひめさまは、ぎよつとして、ばたと戸をしめるなり、知らん顔で席にもどりました。でも心配で心配でたまりません。おひめさまが胸をどきどきさせているのを、王さまはちゃんと見ておいでで、

「ひいさん、なにをびくびくしておいでだい。戸のそとに、大入道おおにゆうどうの鬼が来て、おまえをさらって行こうとでもしているのかい。」とたずねました。

「あら、ちがうの。」と、おひめさまはこたえました。「大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、きみのわるいかえるが来て。」

「そのかえるが、おまいにどうしようというのだね。」

「あの、おとうさま、それはこういうわけなのよ。あたし、きのう、いつもの森の泉のところであそんでいましたらね、金もまりが水のなかにころげおちました。それであたしが泣いていると、かえるが出てきて、まりをとってくれましたの。それから、かえるがしつこくたのむもんだから、じゃあお友だちにしてあげるって、あたしかえるに約束やくそくしてしまいました。まさか、かえるが水のなかから、のこのこやってこようとは、おもわなかったんですもの。それが、あのとおりにやって来て、なかへ入れてくれっていうんですもの。」

そのとき、またろうかの戸をとんとたたたく音がしました。そうして、大きな声でよびました。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。

つめたい泉の わくそばで、

きのう やくそく したことを、

あなたは おぼえて いるでしょう。

いちばん下の おひめさま、

あけてください たのみます。

すると王さまはいいました。

「それはおまえがいけないね。いちどやくそくしたことは、きつとそのとおりにしなければなりません。さあ、はやく行って、あけておやり。」

おひめさまはしびしび立って、戸をあけました。とたんに、かえるはぴよこんとどびこんで来て、それから、おひめさまのあとについて、ひよこひよこ、いすの所までやってきました。

かえるは、そこにしやがみこんで、上をみながら、

「わたしも、そのいすに上げてください。」といいました。おひめさまがもじもじしているど、おとうさまがまた、かえるのいうとおりしておやりといいました。

おひめさまはしかたなく、かえるをいすにのせてやりました。するとかえるがまたいいました。

「どうぞ、わたしを、テーブルの上ののせてください。」

おひめさまが、かえるをテーブルにのせてやると、こんどは、

「さあ、その金のお皿をずっとわたしのほうによせてください。そうするとふたりいっしよにたべられるから。」といいました。

おひめさまは、かえるのいうとおりしてやりました。ほんとに、かえるが、ぴちやぴちや、さもおいしそうに舌づつみうってたべているそばで、おひめさまは、ひとくちひとくち、のどにつかえるようでした。

かえるはたべるだけたべると、おなかをまえへつきだして、

「ああ、おなかがはって、ねむくなった。おひめさま、さあ、わたしをあなたのおへやにつれて行ってください。かわいらしい、あなたのきぬのお床とこのなかで、わたしはゆっくりねむりたい。」

おひめさまは、もうがまんができなくなって、しくしく泣きだしてしまいました。ほんとに、ぬるぬる、ぴちやぴちや、さわるのもきみのわるいかえるが、おひめさまのきれいなお床とこのなかで、ねむりたいなんていうのですもの、おひめさまがかなしくなるのもむりはありません。

するとまた王さまが、

「泣くことがあるか。たれでも、こまっているとき、たすけてくれたものに、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ。」といいました。

おひめさまは、さもきみわるそうに、指のさきでそっとかえるをつまみあげて、上のおへやまでもって行くと、そっすみと隅っすみこにおきました。そうして、じぶんだけが、お床にはいつてしまいました。

ところが、かえるは、さつそく、のこのこはいだしてきて、

「ああくたびれた、くたびれた。はやくゆつくりねむりたい。さあ、そこへ上げてくださいでない、おとうさまにいいつけるから。」といいました。

これでおひめさまは、すっかり腹が立ちました。そこでいきなりかえるをつかみ上げて、ありったけのちからで、したたか、壁かべにたたきつけました。

「さあ、これでたんとらくにねむるがいい。ほんとにいやなかえるつたらないよ。」  
ところで、どうでしょう。かえるは、ゆかの上にごろげたとたん、もうかえるではなくなって、世にもうつくしいやさしい目をした王子にかわっていました。

さて、この王子が、おひめさまのおとうさまのおぼしめしで、おひめさまのお友だちでも、おむこさまであることになりました。そのとき、王子はあらためて、じぶんの身の上の話をして、あるわるい魔法まほうつかいの女のためにのろわれて、みにくいかえるの姿にかえられたが、それを泉のなかからたすけだして、もとのにんげんにかえしてくれるものは、この王さまのおひめさまのほかになかったといいました。それで、あしたはもうさつそく、ふたりつれだって、じぶんの国にかえって行くつもりだともいいました。

### 三

それでふたりはゆつくりやすみました。そして、あくる朝、お日さまがにこにこ、ふたりにお起しになるじぶん、八頭とうだての白馬をつけた馬車が、はいつて来ました。どの馬も、あたまに白いだちようなのはねをかぶって、金のくさをひきずっていました。馬車のうしろには、わかい王さまのごけらいが、しゃんと立っていました。これが忠義もののハインリヒでありました。

忠義もののハインリヒは、鉄のたがたがを三本も胸にまきつけていました。それは、ご主君しゅくんがかえるにされてしまったので、かなしくてかなしくて、いまにも胸がはれつしうになったので、やっとたがをはめて、おさえていたのです。たいせつな王さまが、もとの姿にかえたので、きようさつそく、八頭だての馬車が、おむかえにきたのです。忠義もののハインリヒは、おふたりを馬車のなかに入れてあげて、じぶんはまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことをおもって、ぞくぞくするほど

れしくてなりませんでした。

さて馬車がすこしはしりだしたとおもうころ、王さまのお耳のうしろで、ぱちり、ぱちり、なにかはじける音がしました。わかい王さまはそのとき、うしろをふりかえっていませんでした。

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、いいえ お殿さま、<sup>との</sup>

あれは馬車では ござんせぬ。

せつしやのむねに はめたたが、

殿さま、げえろにならしやつて、

ぎやあぎやあ、泉でなかしやるで、

はりさけそうな このむねを、

むりにおさえた そのたがが。」

それでも、ぱちり、ぱちり、また二どもはじける音がしました。わかい王さまは、そのたんびに馬車がこわれるのではないかとおもいました。けれども、それはやはり、ご主君がにんげんにかえって、たのしい日をおくられることになったので、ふさがっていたハインリヒのむねが、ひらけたため、胸のたががはれつして、とびちる音でございました。



# ブレーメンの町楽隊

DIE BREMER STADTMUSIKANTEN

一

主人もちのろばがありました。もうなが年、こんきよく、おもたい袋をせなかにのせて、粉ひき所じよへかよっていました。さて、年をとって、だんだんからだがいうことをきかなくなり、さすがにこのうえ追いつかうのがむりだとわかると、主人は、こちらでろばのかいぶちをやめたものか、と考えだしました。ところで、ろばは、さつそくに、こりや、ろくなことではないとさとして、逃にげだして、ブレーメンの町をめぐり、とことこ出かけました。そこへ行ったら、町の楽隊がくたいにやとってもらえようという胸算用むなざんようでした。しばらくあるくうちに、往來おうらいに一ぴき、りよう犬が、だるそうにころがつて、口ばかりあけて、はっは、はっは、あえいでいるのに出あいました。それはさんざん野山をかけあっている、へとへとになっているというようすでした。

「おい、すたこら大将、なにをあつぷ、あつぷいつている。」と、ろばは声をかけました。「いやはや、きいてくれ、こういうわけだ。」と、犬はいいました。「なにしろ年はとる、いくじがなくなる、おいらもむかしのげんきで獵場りようばをかけあるくわけにはいかない。主人は、それならいっそ、たたき殺してしまえということになった。あわてて逃げだしたというわけだが、さて、この先どうしてパンにありつくか、じつはかんがえているところだよ。」

「ところで話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の楽隊にやとつてもらおうとおもうんだ、どうだ、おめえ、いっしょに行つて、いちばん、音楽でめしをくう気はないか。おいらリュウトをひくから、おめえ、カンカラ太鼓だいこをたたくがいい。」  
りよう犬は、うん、よかろうというので、いっしょに出かけました。

それからあまり行かないうちに、ねこが一ぴき、往来にすわりこんだまま、それこそ三日も雨をくつたような顔をしていました。

「やあ、どうしたい、床屋とこやの親方、どうやらおひげの手入どころではないという顔つきだが。」と、ろばはいいました。

「いのちとかえがけというところだ。けいきのいい顔をしてもらえまい。なにしろ年をとつて来てね、歯はばくばくになる、ねずみのやつをおいまわすよりか、ろばたで香箱こほこをつくつて、ごろにゃん、ごろにゃん、のどをならしていたくなるさ。そこで、主人のかみさんが、いつそ水にはめておしまいよといひだした。そうされないうちに、とびだしては来たが、さていい思案しあんはないしさ、いったいどこへどう行ったものかと、あぐねているのだよ。」と、ねこはいいました。

「おれたちとなかまで、ブレーメンの町へ行けよ。おまえさんは、夜の音楽ならお手のものだろう、町の楽隊につかつてもらえなせ。」と、ろばはいいました。

ねこは、さつそくさんせいして、いっしょに出かけました。

やがて、三人組だつそうしやの脱走者は、とある屋敷やしき内に来かかりました。門の上に、その家のおんどりがのつていて、ありつたけの声をふりしぼつて、さげび立てていました。

「おい、骨のしんまで、じいんとくるような声を出すなあ。どうかしたのかい。」と、ろばはいいました。

「なあに、あしたはいいお天気ですよつて、知らせてやっているところだよ。」と、おんどりはいいました。

「なにしろ、けつこうなお聖母せいぼさまの日だ、おちいさいキリストさまの下着の、おせんたくして、ほしなすつた日だ。ところが、そのあしたの日曜日にちようびに、お客があるというんで、ここのおかみさんが、なさけ知らずにもほどがあらあ、女中の話だがね、それで、あすはおいらをスープにしてたべつちまうつてんでね、こん晩、さつそく、首をチョン切れといいつかつたよ。だから、せめて声のだせるうちとおもつて、おいら、のどのやぶれるほどわめき立てているんだよ。」

「やれやれ、なんとということだ、赤ずきん、おれたちといっしょに行くがいいよ。ブレーメンの町へ出かけるところだ。ころされて死ぬくらいなら、すこしは気のきいた所が、どこへ行ったってあろうじゃないか。おめえはいい声しているから、なかまになって音楽をながしてあるけ、いっばしかせげるぞ。」と、ろばはいいました。

この申し出は、しごくおんどりの気に入りました。そこで、こんどは四人つれだつて出かけることになりました。

二

ところで、ブレーメンまでは、なかなか一日では行けません。そのうち日がくれたので、森の中へはいつて、そこでひとばんあかすことにしました。

まず、ろばと犬とは、一本の木の下のにごろりと横になりました。ねごとおんどりとは、木の枝の上にやすみました。ところで、おんどりはわざわざこずえの先まで行ってとまりましたが、これが、いちばんの安全な場所であつたのです。さてねようとするまえ、このおんどりはもういちど、東西南北、風のふく方角がどこかとながめまわしたとき、ふと、むこうに、ちらちら火らしいものがみえたので、なかまに声をかけて、どうしても、そうとおくないとところに家があつて、あかりがついているらしいといつてしらせました。ろばが、そこで、

「じゃあおれたち、ここをひきはらつて、もっと先まで行ってみようや。どうもこの宿は上等とはいかないから。」と、いいますと、犬もそこへ行つたら、骨の一、二本、ことによると肉の香ぐらいかげようかとおもつて、さつそくさんせいしました。

こういうしで、四人組は、そのあかりのさしている方角にむかつて、出かけました。するうち、あかりはずんずんはつきりしてきて、ぱあつとてりだしたとおもうと、そこはどろぼうの家で、中にはこうこうと灯がともっていました。

ろばは、なかまでいちばんのせいたかのつぼなので、窓のところまで行って、中をのぞいてみました。

「親方、なにかあつたかね。」と、おんどりはたずねました。

「どうして、あつたかどころのさわぎじゃないぞ。」と、ろばはこたえました。「ちやんと

テーブルごしらえがしてあって、けっこうなごちそうと、のみものが、山とならんでいるよ。どろぼうども、てんでに、はちきれそうな顔で、よろしくやっているところさ。」

「そいつをものにしようじゃないか。」と、おんどりはいいました。

「うん、うん、どうしたってわりこまなきやあな。」と、ろばはいいました。

そこで、まず、どろぼうどもを追っばらうには、どうすればいいかと、四人組の動物は相談をはじめましたが、やがていいくふうがみつかりました。

ろばは、前足を窓にのせることになりました。犬は、ろばのせなかにとびあがることにしました。ねこは犬のせなかによじのぼることにしました。おしまいに、おんどりが、ばさばさととびあがって、ねこの頭の上ののつかりました。いよいよしたくができあがると、一、二、三のあいずで、四にん組はいつせいに、音楽をやりだしました。ろばはひんとわめきました。犬はわんわんほえたてました。ねこはにやおんとなきました。おんどりはこけこつこうと、ときをつくりました。とたんに、まどをつきやぶって、一同へやの中へとびこみました、がらん、がらん、がらん、音をたててガラスはこわれました。

どろぼうどもは、びっくりりぎようてん、きやあとさげび声をあげるとびあがりました。たいへんな怪物がとびこんで来た、そうとよりしか考えません。もうすっかりおびえきつて、てんでに、あたまをかかえて、そとの森の中へ、にげだして行きました。

そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつきました。ごちそうは、のこりものでも、がまんすることにして、それでも、これからあと四週間ぐらい断食してもいいといういきおいで、つめこめるだけ、たらふくつめこみました。

### 三

さて、四人組の楽隊なかまは、おながができると、あかりをけして、めいめいのうまれつきとすきずきにまかせて、いいぐあいの寝床をさがして休みました。ろばはそとのつみごえの上ねどこにねました。犬は戸のかげにねました。ねこはへつついの上で、灰のぬくみをさがしてねました。おんどりは、とまり木のかわりに、屋根うらのはりの上にのりました。なにしろ、みんな遠道をして来て、くたびれていましたから、もうさっそくに、ぐっすりねつきました。

真夜中をすぎたときに、どろぼうどもが、とおくからみますと、うちの中にはあかりがともっていない、中はひっそりかんと、しずまりかえっているようでした。

「どうもおれたち、おどかさされて、にげだしたといわれちゃあ、がまんできないぞ。」

おかしらはこういつて、ひとり手下てしたにいつけて、ようすをみせにやりました。

さて、いつかつた手下がはいつてみると、家の中はどこもひっそりしていました。そこであかりをつけてみようとおもつて、台所へ行きました。すると、やみに光っているねこの目だまを炭火すみびとまちがえて、いきなりマッチをつっこみました。ところが、ねこのほうは、おやすいご用とうけてはくれず、ううう、とたけりながら、顔にとびついて、めつたらやたらに引つかきました。

いやはや、おどろいたのなんの、手下のどろぼうは、したたかにやられて、びつくり、はいもう、うらの戸口から逃げだそうとしますと、そこねていた犬が、とびあがって、むこうずねにかみつきました。そこで、庭へかけだして、つみつみごえごえのそばをかけぬけようとしみますと、ろばがあと足でしたたかに、けとばしました。すると、このさわぎで目をさまさせられためんどりが、はりの上から、はしやぎぎつて、ひと声、キケリツキー、とどくなりました。

どろぼうは、いのちからがら、足にまかせてにげだして、おかしらの所へかえりました。そうしてこういいました。

「どうもはや、たいへん、あの家には、すごい魔物まものがはいりこんでいて、いきなり、きみわるく、ふうう、と息をふっかけて、ながい指で顔をひっかきました。それから、戸の前にはひとり、男が待ちぶせていて、小刀をすねにつきたてました。庭へ出ると、なんともえたいの知れない、まっ黒なばけものが立っていて、こんぼうをふつるて、したたかなぐりつけました。その上、たかい所には、ちゃんと裁判官さいばんかんがひかえています、さあ、そのわるもの、ここへつれて来い、とどなりました。いやもう、さんざんのていたらくで、まっくらさんぼう逃げて来ました。」

それからは、どろぼうどもも、こりて、二どとふたたび、この家にはいろいろとはしませんでした。ところで、ブレーメンの楽隊なかも四人組も、ひどく、ここが気に入ったのでそれなりもうよそへ出て行こうとはしませんでした。

さて、これまで申したことは、ついこないだ、それこそ湯気ゆげの立つほやほやの口からきいたお話ですよ。

# ルンペルシユチルツヒエン

RUMPELSTILZCHEN

むかし、あるところに、こなやがありました。水車小屋でこなをひくのを商売にして、まずしくくらはしていました。ひとり、きれいなむすめをもっていました。

ところで、ひよんなことから、このこなやが、王さまとむかいあつて、お話することになりました。そこで、すこしばかり、ていさいをつくろうため、粉屋はこんなことをいいました。

「わたくしに、むすめがひとりございますが、わらをつむいで、金にいたします。」

王さまは、こなやの話を聞いて、

「ほほう、それはめずらしいげいとうだね。ほんとうに話のとおり、おまえのむすめに、そんなきようなことができるなら、さぞおもしろいことであろう。では、あした、さつそく城へつれてくるがいい。ひとつ、わたしがためしてみてやろう。」と、いいました。

さて、むすめが、いやおうなし、王さまのところへつれてこられると、王さまは、むすめをさつそく、わらのいっばいであるおへやにいれました。そうして、糸車とまきわくをわたして、こういいました。

「さあ、すぐと、しごとにかかるがよい。今夜からあしたの朝はやくまでかかって、このわらが金につむげなければ、そちのいのちはないものとおもうがよいぞ。」

こういいのこして、王さまは、じぶんでへやの戸に、じょうをかつてしまいました。むすめは、ひとりぼっち、あとにのこりました。

さて、むすめは、ぼつねんとそこにすわったきり、いったいどうしたらいいのか、とほ

うにくれていました。わらを金につむぐなんて、そんなこと、まるでわかりようはありません。だんだん、心配になってきて、とうとう、たまらなくなると、むすめはわつと泣きだしました。

するうち、ふと、戸があきました。ひとり、豆つぶのように小さな男がはいつてきて、  
「こい良かったです。」

「こんばんは、こなやのおじよっちゃん、なんでそんなにかなしそうに泣きなさるえ。」  
「まあ、あたし、わらを金につむがなければならぬのだけれど、どうしてするものかわからないの。」と、むすめはいいました。

すると、こびとがいました。

「わたしが、かわりに、それをつむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」  
「この首かざりをね。」と、むすめはいいました。

こびとは、首かざりをもらうと、糸車の前にすわりました。ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、まきわくは、金の糸でいっぱいになりました。それから、こびとは、また二ばんめのまきわくをかけて、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、三どめで、またふたつめのわくが、いっぱいになりました。こうやって、あとから、あとからとやっていくうち、朝になりました。もうそれまでに、のこらずまきわくは、いっぱい金の糸になっていました。

お日さまがのぼると、もうさつそく、王さまはやってきて、へやじゆうきらきら光っている金をみて、びっくりしました。すると、よけい、いくらでももつと金がほしくなりました。

王さまは、また、こなやのむすめをもうひとつの、やはりわらのいっぱいである、しかもずっと大きなおへやへ、つれていかせました。

そうして、こんどもまた、いのちが惜おしかったら、ひと晩でこれを金の糸につむげと、いいつけました。

むすめは、どうしていいかわからないので、泣いていますと、こんどもやはり戸があいて、そこにこびとが姿をあらわしました。そうして、

「わらを金につむいだら、なにをわたしにほうびにくれるえ。」と、いいました。  
「わたしの指にはめているゆびわ。」と、むすめはいいました。

こびとは、ゆびわをもらおうと、また糸車をぶるるん、ぶるるん、まわしはじめました。

そうして、朝までに、のこらずのわらを、きらきら光る金の糸にしあげました。

王さまは、うずたかい金の山をみて、にこにこしながら、でも、まだまだそれだけではまんぞくできなくなりました。それで、またまた、わらのいっぱいである、もつと大きいへやへ、こなやのむすめをつれていかせました。そうして、

「さあ、今晚のうちに、これをしあげてしまふのだよ。そのかわり、しゅびよくそれをしとげれば、わたしの妃（き）にしてあげる。」と、いいました。

「よし、それがこなやのむすめふぜいであるにしても、それこそ世界じゅうさがしたってこんな金持の妻（つま）はないからな。」と、王さまは考えていました。

さて、むすめがひとり、ぽつねんとしていきますと、れいのこびとは、三どめにまたやってきて、こういいました。

「さあ、こんどもわらを金につむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「あかし、もう、なんにもあげるものがないわ。」と、むすめはこたえました。

「じゃあ、こういうことにしよう。王さまのお妃におまえがなつて、いちばんはじめにうまれたこどもを、わたくしにくれると約束（やくそく）おし。」

（どうなるものか、さきのことなぞわかるものではないわ。）と、こなやのむすめは考えていました。

それに、なにしろせつぱつまったなかで、なにをほかにどうしようくふうもありません。それで、むすめは、こびとのぞむまの約束をしまいしました。そうして、こびとは、三どめにまた、わらを金につむいでくれました。さて、そのあくる朝、王さまはやってきてみて、なにもかも、ちゅうもんしたとおりにいつているのがわかりました。そこで王さまは、むすめとご婚礼（こんれい）の式をあげて、こなやのきれいなむすめは、王さまのお妃になりました。

一年たって、お妃は、うつくしいこどもを生みました。そうして、もうこびとのことなんか、考えてもいませんでした。すると、そこへひよっこり、こびとがへやの中にあらわれて、

「さあ、約束（やくそく）のものももらいにきたよ。」と、いいました。

お妃はぎくりとしました。こどもをつれて行くことをかんにんしてくれるなら、そのかわりに、この国じゅうのこらざるたからをあげるから、とってたのみました。でも、こびとは、



「いんにや、生きているもののほうが、世界じゅうのたからのごらざらうより、まじやよ。」と、いいました。

こういわれて、お妃は、おろん、おろん、泣きだしました。しくん、しくん、しゃくりあげました。それで、こびとも、さすがにきのどくになりました。

「じゃあ、三日のあいだ待ってあげる。」と、こびとはいいました。「それまでに、もし、わたしの名前をなんとというか、それがわかったら、こどもはおまえにかえしてあげる。」

そこで、お妃は、ひと晩じゅう考えて、どうかして、じぶんの聞いて知っているだけの名前のごらざらのなかから、あれかこれか、考えつこうとしました。それから、べつにつかいの者をだして、国じゅうあるかせて、いったい、この世の中に、どのくらい、どういう名前があるものか、いくら遠くでもかまわず、のぼせるだけ足をのぼして、たずねさせました。

そのあくる日、こびとはやってきました。お妃は、ここぞと、カスパルだの、メルヒオールだの、バルツエルだの、でまかせな名前からいいはじめて、およそ知っているだけの名前を、かたはしからいつてみました。でも、どの名前も、どの名前も、いわれるたんびに、

「そんな名じゃないぞ。」と、こびとは首をふりました。

二日ふっかめに、お妃は、つかいのものに、こんどはきんじよを、それからそれとあるかせて、いったい世間せけんでは、どんな名前をつけているものか聞かせました。そうして、こびとがまたくると、なるたけ聞きなれない、なるたけへんてこな名前ばかりよつていいました。

「たぶん、リップンビーストっていうのじゃない。それとも、ハメルスワーデかな。それとも、シュニールバインかな。」

でも、こびとはあいかわらず、

「そんな名じゃないぞ。」と、いつていました。

さて、三日めになったとき、つかいのものはかえってきて、こういう話をしました。「これといって、新しい名前はいっこうにたずねあたりませんが、ある高い山の下で、その森を出はずれたところを、わたくしはとりました。ちょうどそこで、きつねとうさぎが、さようなら、おやすみなさい、をいつておりました。そのとき、わたくしはふと、そのへんに一けん、小家こいえをみつけました。その家の前に、たき火がしてありまして、火のまわりに、それはいかにもとぼけた、おかしなかつここのこびとが、しかも一本足

で、ぴよんぴよこ、ぴよんぴよこ、とびながら、はねまわっております。そうして、いうことに、

きようはパンやき、あしたは酒づくり、一夜あければ妃のこどもだ。

はれやれ、めでたい、たれにもわからぬ、おらの名前は、

ルンペルシユチルツヒエン。

と、こうもうしております。」

つかいの者の話のなかから、こびとの名前を聞きだしたとき、お妃はまあ、どんなによろこんだでしょう。みなさん、さっしてみてください。さて、そういうそばから、もうそこへ、れいのこびとはあらわれました。

そうして、「さあ、お妃さん、どうだね、わたしの名前はわかったかい。」と、いいました。

お妃はわざとまず、

「クンツかな。」

「ちがうわい。」

「では、ハインツね。」

「ちがうわい。」

「じゃあ、たぶん、おまえの名前は、ルンペルシユチルツヒエン。」

「悪魔が話したんだ、悪魔が話したんだ。」と、こびとはさげびました。そうして、腹だちまぎれに、右足で、したか大地をけりつけると、からだごとうずまるくらい深い穴あながあきました。それから、いかりたけて、両手に左足をひっぱるひょうしに、じぶんでじぶんのからだを、まっぶたつにひきさいてしまいました。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。